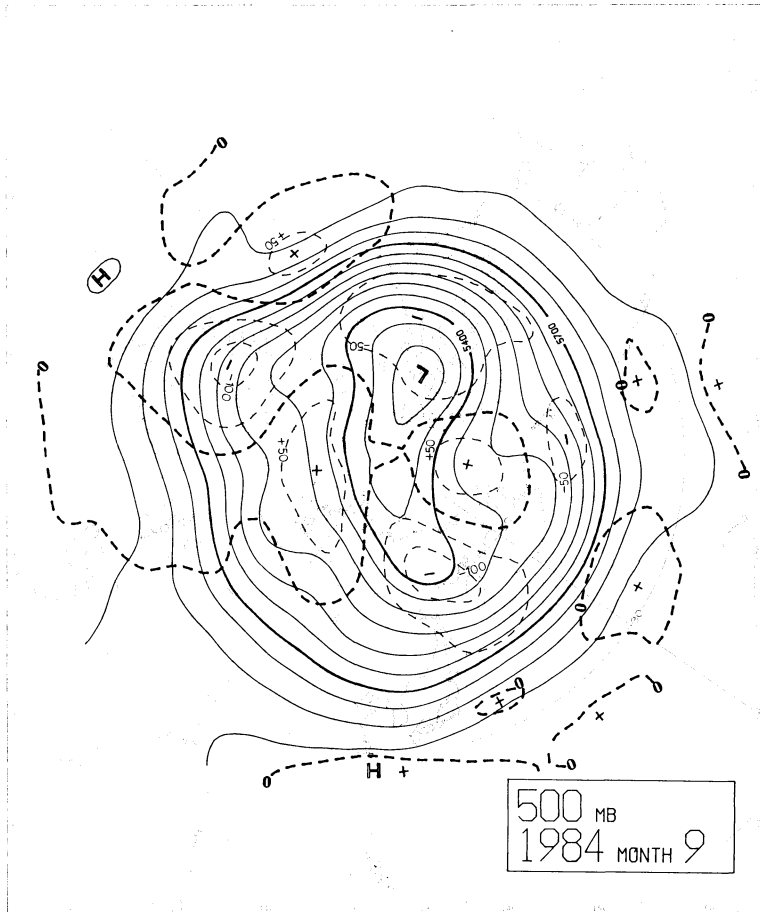


## 月平均500mb天気図。1984年9月。

(破線は平年からの偏差。単位 m)



## 2 波数循環顕著

●**高緯度**：寒気の内容は西半球のバフィン湾付近に位置し、ここから顕著なトラフが北アメリカ大陸と東シベリア方面にのびた。一方気圧の尾根はアラスカとバレンツ海で発達し、高緯度の波数は2が卓越した。

●**中緯度**：北アメリカ大陸の北・中部とヨーロッパは南北流が卓越し、この地域は広く負偏差域となり、特にヨーロッパのトラフに伴う負偏差は標準偏差の2倍の値となった。極東の流れは7、8月から一転して東西流型になり、特に50~60 N帯の低圧が顕著である。また大西洋は強い正偏差場となった。

●**低緯度**：極東付近では南シナ海からフィリピン東方で高圧帯となり、台風発生は少なかった。熱帯解析などからみると、インド中部の高気圧、南部の低気圧

の発達、南西モンスーンが早々とインド北部から退いてしまったことを示している。

●**気候図から**：北極寒気の流出した北アメリカ大陸、ヨーロッパ、東シベリアで低温が顕著であった。特にアメリカ大陸の北・中部は平年差2~3°Cの低温となった。ユーラシア大陸は尾根の発達したウラル付近で高温の外は広く低温となった。日本の気温経過は、ほぼ全国的に平年並となった。

●**今年の特徴**として台風の発生が少ないことと9月までに日本への上陸がない(1941年以來の記録)ことがあるが、9月下旬には熱帯収束帯も現れ3個(9月は4個発生)発生したが、太平洋高気圧は東偏しており日本への影響はなかった。

(気象庁長期予報課 平沼洋司)